

医療行為と自然保護

獣医学科5年 瀧口晴嵩

私は小学生の頃から「動物のお医者さん」になりたかった。父を医師に母を看護師に持ったためか、物心つく頃には脳、心臓、肝臓、腎臓が人間のどこにあるのか理解していた。そしてなにより皆に慕われる医者が“かっこよかった”。同時に幼い頃から動物や昆虫に触れ、なぜだか分からないがその瞬間がとても幸せに感じられた。

そのまま成長していった私は、なんの迷いもなく獣医師が天職だと思い、なんとか獣医科に入学できた。今でもそれに迷いはなく、むしろ確信が強まる一方なのでそれは問題ないのだが、一方で、そもそも医療行為とはなんなのかよく悩む。

ある二次診療の患者が診察室に入ってきた。老齢の犬で腎不全に陥りネフローゼ症候群で全身ぼろぼろだった。腎移植が話に挙がり、オーナーは50万円以上のオペ費用を払うことをいとわなかった。それはいいが、ドナーがなかなか見つからない。すると後日そのオーナーは二匹の犬を連れて来院してきた。一匹は腎不全の犬。そしてもう一匹は、ペットショップで買ってきた新たな犬だった。「この子の腎臓をこの子に移植してください。」そう言い放った。

この話をとんでもない話だと思った人が多いだろう。しかし、このタイプのオーナーは少なくない。「すごい話だな…」と思うと同時に「ひどい飼い主だ」とも思わないだろうか？ ペットショップで買われてきたこの犬の事をどう考えているか？ そもそも老齢の犬にこんな高度医療を押しつける事が、どういう事な

のかちゃんと考えているのか？ この飼い主はただ自分の気持ちだけを基準にしているのではないか？ しかし、このオペを行うとしたら、執刀するのは紛れもなく獣医師だ。

獣医学生になると当然、獣医師法を学ばなくては行けない。暗唱するわけではないが、意外と常識では通用しない事が多く、獣医師は特殊な決まり事に縛られていることに気付く。その中で講義中しつこく言われた、“意外”な事がある。

「獣医師は、飼育動物に関する診療及び保健衛生の指導その他の獣医事をつかさどることによって、動物に関する保健衛生の向上及び畜産業の発達を図り、あわせて公衆衛生の向上に寄与するものとする。」（獣医師法 総則）

つまり、獣医師は直接的に動物のためではなく、間接的に人のために使命を全うすべきであるという事。産業動物（牛、豚）は「柔らかい肉がいい」「臭い肉は食えない」「肉は高い」とわがままを言う人間のために、とてつもない負荷にさらされながら飼育、いや製造されている。遺伝子改良による遺伝病、繁殖回転の効率化を追求したために多発する周産期疾病の数々、栄養価が高い餌を多給させられたために発生する消化器疾患。採算が合わない状態になったら殺処分だ。和牛の“さし”は「骨格筋の脂肪変性」というれっきとした病気だ。しかし消費者が“さし”を好むから牛をビタミンA不足にわざわざ陥らせる。「さしの入った牛は大事に育ててもらっている」と、とても罪な勘違いしている人は多いはずだ。病気の牛を食べているのに…。フォ

アグラは獣医学生の立場で言わせてもらえば、虐待以外のなにものでもない。がちょうに脂肪を毎日飲ませ、「肝脂肪」にさせ、死なないうちにさばいて売る…。小動物は別だろうという声が聞こえてきそうだが、本質は変わらないと思う。高い費用を徴収してまで狂犬病ワクチンを接種することを義務化しているのは実は動物のためではなく人のためだ（致死率100%）。人間の公衆衛生を改善するために様々な義務を獣医師は負う。動物の病気を治すのも、よく考えれば人が治してほしいと言ってやってくるからだ。チワワの「××ちゃん」にとって何が幸せなのか勝手に判断するのは人間だ。安楽死するのか、抗ガン剤の治療に耐えさせるのか、腹を開けるのか…。

「獣医師は人のために働いている！？では動物はただの道具なのか？」獣医さんになりたくてこのサイトを閲覧している高校生を始めとして、多くの人が怒るだろう。私も例外ではなかった。「獣医師は結局、人のために働いているのですよ」などと講義で聞けば、なんて宗教的な刷り込みが行われているのだろうと憤慨するだろう。最初は私もそう思ったが、残念ながらこのようにいろんな事を知れば知るほど正鵠を射ていると気づいてしまう。幼かった自分は、その道に進んだが故に悲しい現実を目の当たりにしてしまった。

人間はとてもわがままだ。その人間の中にはこう言う人がいる。「自然は守るべきで、エコな生き方をしなくてはいけない。」そして、産業開発をする会社の事を悪く言い、人や伴侶動物への手厚い医療行為を冷ややかな目で見ると。しかしそんなあなたがこの世に生を受け健康に生きているのは一途に医療、獣医療の発達のおかげ。医療の発達で新生児生存率が飛躍的に改善され、獣医療の発達で幾

千もの伝染病が駆逐されたから、健全な食肉が供給されているから、始めて「自然を守るべきだ」と考える人間が存在できている。つまり、持続可能性の話は別にして、現実として今現在生きている人間のほとんどは医療行為によって存在し得ている。そして、病気をすれば必ず医者に泣きつく。いわば人間が生まれながらに背負う十字架のようなもの。本当に野生動物の多様性と保全を実現したかったら、まずしなくてはいけないのは間違いなく人間という動物の個体数管理、つまり駆除だ。それをする事は当然憚られる。これこそが自分も含め人間のわがままと偽善を象徴していると思う。残念ながら、この世の中には「人間のため」という言葉で解決される事が溢れている。

さて、しかし自分はやはり動物が好きで動物のためにも働きたい。地球上の野生動物たちにも絶滅してもらいたくない。人-伴侶動物-野生動物の関係はとても複雑で、矛盾を抱えすぎている。しかし、感覚的な発言だが動物はみな美しく、りりしい。そんな彼らを見つめ「生物多様性」を保全する事が、当研究室の大きな目的の一つだと思う。「結局は人間のための世の中」と、「動物への無償の愛」の板挟みに結論が出ない私は、この研究室で生態学の教科書を勉強した。その冒頭に生態学と生物多様性について書かれていた。感情的なものではなく、なぜ生物多様性を守らなくてはいけないかの論理的な理由付けをずっと知りたかった私は、大いに期待した。「生態学では、生物多様性を維持することに意味があるという前提のもと成り立つ。」おおよそそのようなことが書いてあったので、私は落胆した。未だに理論的に「なぜ生物多様性を守る必要があるか？」「純粋に動物のため

に何かする価値は？」という私の疑問に論理的に答えてくれた人がいない。

もし、ただなんとなく「自然を守るべきだ。」
「動物のために働きたい。」という人がいたら、是非私を納得させられるような理由を考えてほしい。その理由は簡単に見つかるはずがないからずっと考え続けてほしい。考えつかなくてもいいが、無責任に「自然が一番。」

と自分を正当化しないでほしい。背中の十字架を顧みてほしい。

これは全ての人間へのメッセージであり、特に生物学の道に進む人は一緒に考えてほしい。さらにその中でも、最も動物を“救い”、最も動物を痛めつける獣医師になりたいという中高生には…。